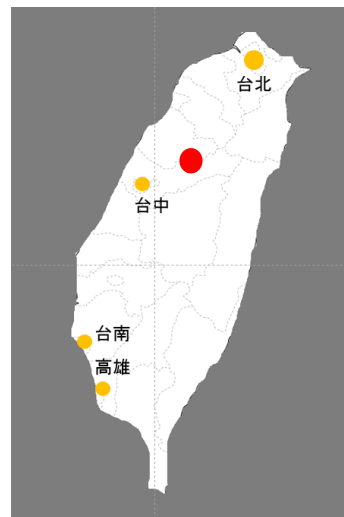


## タイヤル族伝統織物の再興・象鼻部落 —尤瑪・達陸（ユマ・タル）のたゆまぬ挑戦

くらし学際研究所・チーム〈近隣アジアを知る〉

垂水英司



今日（2010年）は、私にとって3度目の象鼻部落訪問である。象鼻部落は大安溪沿いのタイヤル族の集落で、No.8で紹介した達観部落のさらに上流にある。

今回の一行は「災害におけるジェンダーの役割」の研究チーム4人で、921震災後活躍した台湾の女性たちにヒヤリングするのが主目的だ。象鼻部落でタイヤル伝統の織物を再興しようと奮闘している織物家、尤瑪・達陸（ユマ・タル）を訪ねる予定だ。一行メンバーの内3人が神戸の女性研究者で、つまり私は「黒一点」ということになる。もちろん私はこのジェンダー問題に特別な造詣があるわけではなく、ヒヤリング先への先導役といった役回りだ。もう夜も更けてきた。今日中には無事象鼻の民宿にたどり着きたいと漆黒の夜道を急いだ。



大安溪沿いの象鼻部落。タイヤル伝統の織物を再興しようと奮闘している織物家、尤瑪・達陸（ユマ・タル）の工房・野桐工場/泰雅染織文化園區がある。（手前の一郭）

尤瑪・達陸は、大陸湖南人の父とタイヤル族の母の間に象鼻部落で生まれた。国立中興大学で学んだ後、台中縣立文化中心博物組編織工藝館に職を得る。そこの仕事を通じてタイヤル族の伝統的織物の美に心奪われる。しかし、それらの材料、技術や技法はもはや継承されていないことに心痛めた。当時29歳だった尤瑪は決然と公務員の職を辞し、失われた伝統織物の再興を目指して活動を開始する。

部落に戻った尤瑪は、かつて織物をしたことのある部落の古老たちから技法を聞き取った。尤瑪の祖母からも50年間忘れていた記憶の糸を手繰り寄せながら教えてもらった。

織物材料の基本となる苧麻（ちょま・カラムシ）も栽培されなくなっていた。苧麻の苗を探し出して栽培し、さまざまな草木から染色材料を試し、機織り機を試作しながら復元の努力を重ねた。そのためスタートさせたのが「泰雅織物研究中心 / 野桐工場」だ。

伝統織物に関する徹底した調査にも取り組んだ。海外の博物館にまで足を延ばし、かつてのタイヤル織物の伝統技法の資料を収集した。また、専門的な力量を高めるため、輔仁大学織品服飾研究所に入学、正式に修士学位も獲得した。さらに、故郷に戻った熱心な青年たちとふるさとの記憶を取り戻そうと北勢群文化協会を設立、尤瑪は伝統工芸活動を担った。

921地震は尤瑪にとっても大きな転機となった。部落は土石流で部落産業だった甘柿が被害を受けるなど、村民の生活も打撃を蒙った。ママさん達から「織物で何か生活の助けにならないの」といった声も聞いた。村の伝統織物を単に文化という側面だけでなく、部落復興、生活経済という側面からとらえるべきではないか。研究者から部落活動者へ。材料の栽培、織物技術の教育・訓練、技術の開発・研究を部落産業にしていくことに眼を向け始めた。そしてそれを実現する総合的機能を持った泰雅染織文化園区をつくることに取り組んだ。

もちろん最初から順調にいったわけではない。「原住民の文化を売り物にするのか」といった声も内部から聞こえた。しかし、彼女はくじけなかった。大安溪のタイヤル部落から織女たちが集まった。そして、技術を学んだ織女は自分の部落に戻って工房を持ち始めている。私も愛用している達観部落の織物製品の作り手は尤瑪の教え子たちなのだ。尤瑪は教育、普及、継承に力を入れ、伝統織物の文化が拡散することを願っている。

研究チームのインタビューは順調に終了した。泰雅染織文化園区を参観した後、象鼻部落を後にした。後日、研究チームで台北にある中央研究院を訪れた時、ホールの壁面に大きな織物を使ったインスタレーションが目に入った。近づいて作者をみると、それは尤瑪・達陸の作品だった。彼女はこうしたアート作品にも意欲的に取り組んでいる。アーティストでもあるのだ。

尤瑪は活動の場を次々と広げている。原住民族の抗日事件・霧社事件を題材にした台湾映画「セデック・バレ」（原題・賽德克・巴萊 2011年）が台湾で大ヒットし、日本でも公開された。この映画の衣装制作を担ったのが尤瑪である。

伝統織物の研究者であり、織物・染色家であり、社会活動者であり、アーティストでもある尤瑪・達陸は、さまざまな引出しを持って活躍している。ちなみに、2016年には人間國寶藝師に認定された。これからの更なる飛躍を期待したい。



尤瑪・達陸は、伝統織物の研究者であり、織物・染色家であり、社会活動者であり、アーティストでもあるのだ。